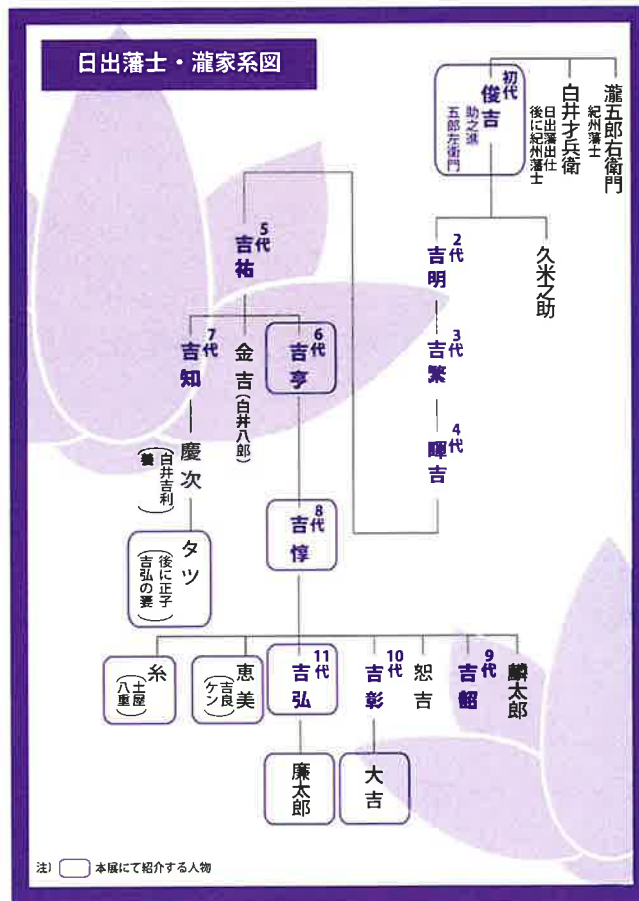


に寛永 2(1625) 年には二百石を与えています。この時、次兄の白井才兵衛も日出藩に中小姓として召し抱えられましたが、後に紀州に戻っています。日出に残った瀧俊吉とその子孫は家老などの要職を歴任して、日出藩の発展に貢献することとなるのです。



II 瀧家菩提寺・龍泉寺

瀧家一族の菩提寺・洞雲山龍泉寺

日出町佐尾にある洞雲山龍泉寺は日出町内では数少ない浄土宗の寺院であり、その紋所には浄土宗が定めた宗派の紋である「月影杏葉紋」と、その総本山である知恩院（京都市東山区区林下町）の寺紋である「三つ葉葵紋」の二つがあります。

龍泉寺の起こりは戦国時代にさかのぼり、筑前国の岩屋城（現在の福岡県太宰府市浦城）から落ち延びてきた高橋一族が大切に護持していた阿弥陀仏を安置するために建立された草庵とされています。そして、その草庵に善蓮広誉上人がはいる、慶長 14(1609) 年開山となったのです。

龍泉寺は、江戸時代には日出藩上士の菩提寺となり、境内には瀧家一族をはじめ長沢家・帆足家などの墓があります。龍泉寺における瀧家墓所の配置図（作成年不明、大分県立先哲史料館蔵）には現在のように寄せ墓をする前の墓地の状況が描かれており、初代俊吉から 10 代吉彰までの瀧家歴代当主とその一族の墓やその分家である白井家の墓の様子がわかります。

平成 23(2011) 年、大分市の万寿寺より「瀧家累世之墓」と刻まれた瀧吉弘一族の墓と東京音楽学校の同窓生から贈られた「瀧廉太郎君碑」が龍泉寺に移されました。現在、毎年 6 月 29 日の瀧廉太郎の命日には廉太郎の冥福を祈る忌辰祭が開催されており、その顕彰が行われています。

江戸時代における瀧家の足跡

和暦	西暦	主な出来事
慶長 6	1601	木下延俊（初代藩主）、日出に初入部（日出藩の成立）
慶長 14	1609	広養（光登とも）、浄土宗龍泉寺を開基（後に、瀧家菩提寺となる）
寛永 2	1625	4月16日 瀧助之進（瀧家初代、後の五郎左衛門俊吉）、延俊より二百石を拝領
寛永 9	1632	肥後国熊本藩加藤家が改易、延俊は幕府より八代城（現熊本県八代市）の城番を命じられるこの時、瀧俊吉も主君延俊に従って八代城に向かう
寛永 14	1637	島原の乱勃発。瀧俊吉、幕府上使の御附使として派遣される
明暦 3	1657	府内藩日根野家改易。前年より日出藩は木付（片栗）藩と府内城受取及び城番を命じられるこの年、俊吉は府内町奉行を勤める
享保 9	1724	11月25日 瀧吉繁（3代当主）、4代藩主木下俊景の瀧家厚敷への節成りに対して懺悔する
宝暦 11	1761	6月 徳川家重（江戸幕府 9代将軍）薨去により、朝廷の使者が江戸へ下向 瀧吉彰（4代当主）、接待役を命じられた9代藩主木下俊景の補佐にあたる
安永 4	1775	1月11日 吉祐（5代当主）、長崎奉行所へ試験借用のため派遣される
寛政 7	1787	12月1日 瀧吉亨（進一、五郎左衛門、6代当主）、郡代役を拝命
寛政 8	1796	瀧吉亨、二宮尊徳が編纂した「回廊考」12巻の校訂を行う
天保 3	1832	瀧吉徳（平之進、8代当主）、師の納足萬里とともに13代藩主木下俊景より家老に任命される
嘉永 5	1852	瀧吉昭（実親・司馬人・賢之進、9代当主）、小田徳庵（外科医、帆足萬里門弟）の診察・治療を受ける

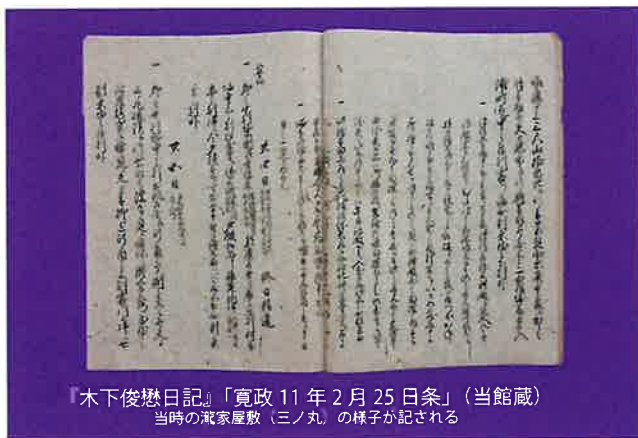


III 日出藩士・瀧家

日出藩士・瀧家の人々

瀧家は初代当主俊吉から11代の吉弘に至るまで家老や物頭(武頭)を代々勤める、日出藩の中樞を担う家でした。11代藩主木下俊懋の日記には、瀧吉亨(五郎左衛門・庫之進、6代当主)が弟の瀧金吉(白井八郎)とともに登場しています。藩外との交渉にも活躍しており、寛政7(1793)年3月岡藩主の御座船が深江港に入港した際には吉亨が使者として対応しています。また、寛政11(1799)年2月末、中国への貿易品として輸出する海鼠の調査のために日出領にやってきた日田代官の羽倉権九郎を辻間村にて饗応しています。

8代当主の瀧吉亨(平之進)は日出の先哲である帆足萬里の門弟となり、帆門の塾頭として門人をまとめました。天保3(1832)年には師の萬里と、及び2年後はこれまた萬里の弟子である関準平が加わって家老職を勤め、藩政改革にあたりました。天保6(1835)年に萬里が家老に辞任した後も、関と家老職にとどまり藩運営を担いました。



『木下俊懋日記』「寛政11年2月25日条」(当館蔵)
当時の家老屋敷(三ノ丸)の様子が記される

IV 吉弘・廉太郎・大吉 - 瀧家の実力(チカラ) -

明治時代に勇躍した瀧家の逸材たち


瀧吉弘が瀧家第11代当主となった慶応元(1865)年4月、徳川幕府は第2次長州征伐の軍を起し長州藩に攻め込みましたが、西洋の新式銃を装備していた長州軍に敗北しました。これ以後、日出藩内では藩兵の洋式化を目指すようになり、瀧吉弘らは西洋式の軍隊操練法を学ぶために熊本藩領鶴崎に派遣されることになりました。幕末維新の混乱期には吉弘ら勤王派の活躍で藩論をまとめ上げ、豊後諸藩の中では比較的早い時期に新政府軍へ味方することを表明しました。

明治時代に入ると、吉弘は明治政府の太政官から日出藩の権大参事や大参事に任命されて藩の重鎮として活躍しまし

た。明治4(1871)年の廃藩置県により日出藩が消滅すると、吉弘は上京して明治政府の官僚となりました。この時、吉弘一家とともに上京したのが、兄吉彰の長男である瀧大吉でした。大吉は上京後に工部大学校へ官費入学して、ジョサイア・コンドルより西洋における最先端の建築学を学びました。工部大学校を卒業した後、大吉は陸軍省に所属する建築士として国内をはじめ朝鮮や中国などで活躍します。

明治12(1879)年には、吉弘長男として廉太郎が誕生しました。廉太郎は成長するにしたがって音楽に関心を持つようになり、音楽家の道を志すようになりました。従兄の大吉の支えもあって、東京音楽学校へと進学し、卒業後は音楽家として「荒城の月」などの名曲を発表しました。

吉弘は日出藩の武士と明治政府の官僚として、大吉は建築士として、廉太郎は音楽家としてそれぞれの得意とする分野で大いにその才能を開花させたのです。



瀧 吉弘

- 瀧家11代当主
- 文武両道の人で、幕末期には日出藩兵を隊長として幸いる
- 日出藩の消滅する明治4年の直前には、藩の重鎮(権大参事、後に大参事)として活躍
- 明治政府の官僚として活躍
- 内務卿大久保利通に秘書官として重用される

略年譜		
元号	西暦	主な経歴
天保13	1842	2月15日 自母にて瀧吉亨(平之進、9代当主)の五男として生まれる
安政5	1858	この年で明教した事功院にて勉学開始
慶応元	1865	兄吉彰の死去により、瀧家11代当主となる
慶応2	1866	熊本藩領鶴崎に派遣され、西洋式の軍隊操練法を学ぶ
慶応3	1867	石井邦敏・麻生貞樹らとともに藩論をまとめ、日出藩が明治政府軍に味方することを決める
慶応4	1868	昨年より16代藩主木下俊懋を奉じて入京。高台寺門前邸に転居する
明治2	1869	幕府参事後、日出藩の権大参事として大参事を拝命する
明治4	1871	幕府参事より日出藩が解される。吉弘はそれ以後参事として従事する
明治5	1872	8月 友人の石井邦敏のすすめにより上京し、大蔵省に出仕する
明治7	1875	1月 内務省に出仕 2月 内務卿大久保利通の佐官への出立(佐官の乱平定のために秘書官として随行する)
明治12	1879	3月24日 長男として廉太郎が誕生する
明治15	1882	1月 地方官となり、神保町少参事館を拝命する。吉弘一家、横浜の官舎へ転居する
明治18	1885	ハワイ皇帝カラカウアより勲章と勲位が贈られる
明治22	1889	3月 大分都長となり、大分河へ転居する
明治24	1891	11月 直人郡長となり、竹田町へ転居する
明治28	1895	11月 直人郡長を辞職免官する。その後、大分河へ転居する
明治36	1903	6月29日 海により長男の瀧太郎、死去。万寿寺に移される
明治37	1904	8月9日 大分河にて死去。故人の希望により、足利島山に墳墓をつつる万寿寺に移される



『瀧吉弘勲記』(大分県立先哲史料館蔵)

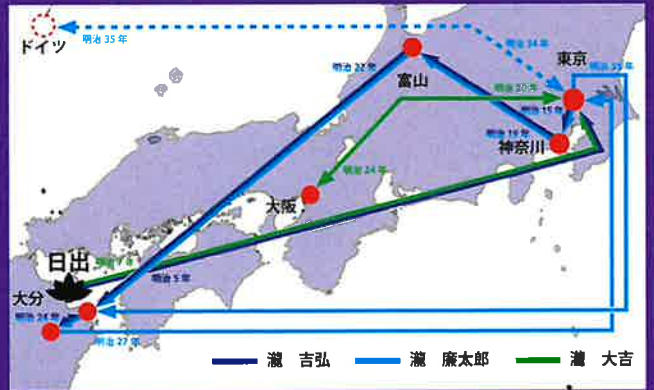


瀧 廉太郎

- 音楽家
- 後世、「楽聖」と讃えられる
- 成長してからは従兄の瀧大吉の助言もあり、音楽家の道を志す
- 「荒城の月」や「箱根八里」などの現代にも残る名曲を生み出す
- 楽器はピアノが得意
- 明治政府の命によって、ドイツへ留学する

略年譜

元号	西暦	主な経歴
明治12	1879	8月24日 瀧吉弘(11代当主)の長男として東京市芝区南久保町にて生まれる
明治15	1882	11月 父吉弘の神奈川県への転勤により、吉弘一家は鎌倉に移居する
明治19	1886	8月 吉弘の富山県への転勤により、9月に吉弘一家は富山県に移居する
明治21	1888	4月 吉弘 非職により、5月に吉弘一家は東京へ転居
明治22	1889	3月 吉弘が大分県大分郡島田なるが、廉太郎は東京に残る
明治23	1890	4月 廉太郎、麹町小学校を卒業後、大分町の高等科のもとへ帰る
明治24	1891	11月 吉弘が大分県直入郡長を辞任する。翌月、一家は竹田へ転居
明治26	1893	5月 徳島市西(直入郡高小)小学校教員より音楽を教わる
明治27	1894	4月30日 直入郡高等小学校を卒業。5月に上京し、従兄の瀧大吉宅に身を寄せる 12月 高等師範学校附属音楽学校に入学する
明治29	1896	12月12日 音楽学校校友会主催の演奏会にて初めてピアノの独奏を披露する
明治31	1898	7月9日 音楽学校本科専門科を首席で卒業
明治34	1901	ドイツのライプツヒヒ王立音楽院へ留学する。12月に病気のため、聖ヤコブ病院へ入院する
明治35	1902	7月9日 横濱命令が出され、8月24日に日本へ出発(10月17日に横浜着) 8月末、廉太郎、横濱科コンドムにて土井晩翠と出会う 11月24日 大吉の急逝により、大分町の実家に戻る
明治36	1903	2月14日 廉太郎、「夢(うらみ)」作曲 6月29日 廉太郎、逝去。両親の科によって大分の万寿寺に葬られる



瀧吉弘・廉太郎・大吉の軌跡



瀧廉太郎のドイツ留学の旅路



瀧 大吉

- 瀧家 12 代当主
- 叔父の瀧吉弘一家とともに育ち、廉太郎から「大兄さん」と慕われる
- 廉太郎の音楽家志望に理解を示し、吉弘を説得する
- 建築家コンドルの弟子、建築士として活躍
- 「(東京)陽城会」を創立して、東京における日出出身者の交流をはかる

略年譜

元号	西暦	主な経歴
文久元	1861	12月26日 瀧吉彰(10代当主)の長男として日出城下に生まれる
慶応元	1865	父吉彰の死により、吉弘が侍格取られる
明治 7	1874	吉弘一家とともに上京する
明治10	1877	工部大学校(後の東京大学工学部)に入学し、ジョサイア・コンドルに建築学を学ぶ
明治15	1882	康内重(コンドルの義弟)の建築現場監督の助手を務める
明治16	1883	5月 工部大学校建築学科を卒業する
明治19	1886	3月24日 瀧吉弘から家督を譲られ、瀧家 12 代当主となる 4月 河合治蔵らと道家学会の発起に尽力
明治20	1887	1月 建築雑誌「創刊」を創刊し、瀧大吉、約6年わたって編集・発行に携わる 6月 帝國大学から工学士の学位が授与される 10月 帝國工業会社に入社し、建築部長となる
明治21	1888	10月 明治工業会社を設立し、建築部長となる
明治22	1889	大塚にて土木建築工事部事務所開設 大塚にて高橋洋吉と工業学校を開設 私家版として「建築学講義」(全3巻)を出版
明治23	1890	大吉、ノルデンのもとで東京市役所公園での公園部の工事管理を行う 10月 「工業学校講義」を創刊(1894明治27)年8月まで発行
明治24	1891	3月 上京して陽城会を創設する
明治26	1893	1月 道家学会で「新機構」と題して講演
明治27	1894	5月 大吉、上京した廉太郎を出迎えて自分の家に下宿させる 8月 「建築学講義」を再発行
明治28	1895	12月 初六海軍少将に任命される
明治35	1902	10月 大吉夫妻、横浜でドイツから瀧廉太郎を出迎える 11月29日 脳溢血にて急逝



瀧吉弘一家の集合写真

竹田市歴史文化館蔵



瀧大吉一家と音楽学校在学中の瀧廉太郎

大分県立先哲史料館蔵



『陽台雑誌 第四號』(明治 34 年、大分県立図書館蔵)



『陽台雑誌 第九號』(明治 37 年、大分県立図書館蔵)

V 追憶の中の廉太郎 - 銅像に込められた願い -

鎮魂、そして追想 -「楽聖」廉太郎を慕う人々-

明治 35(1902) 年 10 月 19 日、瀧廉太郎は留学先のドイツから帰国しました。廉太郎にとって念願であったドイツへの留学は病(肺結核)のために中断せざるを得なくなり、無念の気持ちを抱えたままの帰国だったので。そのような廉太郎に最大の理解者であった従兄の瀧大吉が急逝するという不幸が襲います。廉太郎の大分への帰省はその翌日だったので。

廉太郎は大分で療養に努めながら、人生最後の作品となる「憾」の製作に取り組みました。この曲には廉太郎の胸中にうずまく自身の境遇への激しい思いが表現されているとされています。完成したのは明治 36(1903) 年 2 月 14 日。そして同年 6 月 29 日、廉太郎は弱冠 23 歳で亡くなりました。さらに翌年の 8 月 9 日、廉太郎の父である瀧吉弘もまるで息子の後を追うかのようにこの世を去りました。

瀧家の逸材たちが相次いでこの世を去った後、昭和 25(1950) 年には廉太郎を慕う人々によって、大分市や竹田市に廉太郎の銅像が建てられました。この銅像の作者は廉太郎とは竹田高等小学校の後輩にあたる朝倉文夫であり、銅像の裏に朝倉文夫が回想した廉太郎との思い出が記されています。

瀧家にゆかりのある日出町では時報に瀧廉太郎の曲が採用され、10 時(学校の長期休み期間のみ)には代表作である「荒城の月」が、正午には「花」が流されています。そして、夕方には「雀」をもって一日の終わりを告げています。





日出町に瀧廉太郎像を寄贈した田吹繁子の銅像
別府市野口公園

上：『花（花盛り）』
瀧廉太郎自筆譜
大分県立図書館蔵

中：楽譜『荒城の月』
『中学唱歌』個人蔵、
竹田市歴史文化館寄託

下：楽譜『雀』
『幼稚園唱歌』個人蔵、
竹田市歴史文化館寄託

【主な展示資料】

プロローグ 追憶－日出瀧家と廉太郎を偲んで

- I 紀州から来た瀧家
（日出藩）御家中系図【当館蔵】
瀧家系図略伝【大分県立先哲史料館蔵】
- II 瀧家菩提寺・龍泉寺
日出図跡考【当館蔵】
伝瀧廉太郎愛用の火鉢【龍泉寺蔵】
- III 日出藩士・瀧家
木下俊徳寛政11年日記【当館蔵】
郡代瀧五郎左衛門申達案【当館蔵】
- IV 吉弘・大吉・廉太郎－瀧家の実力（チカラ）－
瀧吉弘履歴書【大分県立先哲史料館蔵】
瀧吉弘熱記【大分県立先哲史料館蔵】
暁谷雑誌第9号【大分県立図書館蔵】
暁谷雑誌第4号【大分県立図書館蔵】
- V 追憶の中の廉太郎－銅像に込められた想い－
「憾」手稿譜1【竹田市歴史文化館蔵】
「花（花盛り）」瀧廉太郎自筆譜【大分市歴史資料館蔵】
楽譜「雀」【個人蔵、竹田市歴史文化館寄託】
楽譜「荒城の月」【個人蔵、竹田市歴史文化館寄託】
- VI エピローグ 妹トミの願い
- VII 特設「荒城の月」を巡るエピソード
土井晩翠自筆色紙【大分県立先哲史料館蔵】
土居晩翠書「荒城の月」（軸装）【個人蔵、日出町複製】

【協力機関】 ※順不同
大分県立先哲史料館 大分県立図書館 大分市歴史資料館
竹田市歴史文化館 和歌山県立博物館 日出町立図書館
朝倉文夫記念館 朝倉彫塑館 洞雲山龍泉寺

エピローグ 妹トミの願い

初代俊吉から始まり、現代に至るまでの瀧家と「楽聖」廉太郎にまつわる物語はここで終わりを迎えるのですが、ここまで見て来たように、史料をひもとけば、知られていなかった瀧廉太郎の祖先の物語もこれ程までに詳細に明らかにできるのです。そこで、廉太郎の妹である安部トミの言葉を紹介します。

昭和41(1966)年5月、安部トミは大竹義則（日出の郷土史家）に宛てた手紙の中で日出町立萬里図書館（現在の日出町歴史資料館・帆足萬里記念館）が完成を迎えたことに対する祝辞を述べるとともに次のように記しています。

「本当に将来の郷土はすべて「生き生きとした血の通った発展」を遂げて頂きたいと切に願ってやみません。」

21世紀を迎えた今、安部トミが願った郷土の「生き生きとした血の通った発展」とはどのようなものなのか、どの様にすれば実現できるのか、考えさせられます。しかし、少なくとも歴史・文化財を担当する者にとっては、郷土の歴史と文化財とともに廉太郎をはじめとする瀧家の物語を後世までつたえていくことが、その前提にあるものと思えてなりません。

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館

【開館時間】9:00～17:00 ※入館は16:30まで

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）

年末年始（12月29日～1月3日）

【住所】大分県速見郡日出町2602番地1

【問合せ先】TEL0977-72-6100 FAX0977-72-6103

■所管課 日出町教育委員会社会教育課（文化財係）
〒879-1506 大分県速見郡日出町3891番地2
TEL0977-73-3222 FAX0977-72-8680



日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館ホームページ（アーカイブ）にて、過去に開催した特集展を公開しています。

- 【令和5年】第1回特集展「写真で振り返る日出の風景と辻間楽」／第2回特集展「ひじの少年少女 まちの近代－学校日誌にみえてくる時代」
- 【令和4年】第1回特集展「学芸員のまなざし」／第2回特集展「詩文に見る日出の景色」／第3回特集展「泰平の世と殿様と－木下俊徳日記から見えてくるもの－」
- 【令和3年】第1回特集展「ひじ町を掘る－友田道跡（藤原）と埋蔵文化財－」／第2回特集展「日出・信仰の残影－ザビエル来豊から470年を経て－」／第3回特集展「帆足萬里のこころ－学びと人のつながり－」
- 【令和2年】第1回特集展示「疫病・病魔－先人達の闘い－【令和元年度】特集展「日出藩主日記から読み解く参勤交代」
- 【その他】発見資料展「延由が蘇る－国松伝説を背負った男の刀－（令和3年）／ひじはく「知られざる日出藩石工衆の技に迫る